

## 編集後記

木原活信会長による年頭のあいさつにもありましたように、残念ながら社会は依然としてコロナ禍の中にあります。先日、地元テレビ局制作の「病への差別 終わらない闘い ハンセン病療養所の90年」という番組が放映されていました。現在、新型コロナウイルス感染症の罹患においても様々な差別が生じています。これも人間の中にある性質なのでしょうか。仮にそうだとしても、人間は理性を働かせなければならないでしょうし、正しく病気を理解し、正しく病気を恐れることが必要であると言えます。そして、このような状況だからこそ、ソーシャルワークと権利擁護機能の発揮が求められるのではないのでしょうか。

さて、今号も盛りだくさんの内容となりました。主な内容ですが、「日・韓・中 3カ国学術交流の報告」、「韓国社会福祉共同学会大会での自由研究発表報告」、「中国・北欧社会福祉国際フォーラムでの自由研究発表報告」、「地域ブロック情報(九州・北海道)」等で、「これからの社会福祉学に期待すること」の第二回目は、大橋謙策先生による若手研究者に向けられたメッセージでした。しかし、これは若手研究者だけではなく、大学教員全体に向けたメッセージだと受けとめました。特に「社会福祉系大学で、科目を担当する教員は科目を担当できるということで採用されて“一人前”になったつもりになるが、だからといって社会福祉学の研究者と称していいのだろうか」とのご指摘です。またこれは研究者としてのあり方だけではなく、画一化されていく教育課程の中において、大学講義の質そのものが問われているようにも思えました。大きな課題です。

最後に現在、広報委員会では、次年度に向けた事業計画を作成中です。学会員の皆様を始め多くの人たちに読まれる広報媒体の企画と情報発信にこれからも努めてまいります。どうぞ、皆様のご意見やご感想、そして、広報内容や手法へのアイデアをお寄せください。

山本 浩史(新見公立大学)